

研究主題「多面的・多角的に道徳的価値を捉え、人間としての生き方についての 考えを深める道徳科の指導の工夫

ー I C Tを活用した生徒の相互評価活動を通してー」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課

文京区立第九中学校 主任教諭 戸上 理子

第1 研究のねらい

道徳科では、目標に示された「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」を具現化していくことが求められている。

文部科学省が令和3年度に実施した道徳教育実施状況調査では、「道徳科の授業を実施する上での課題」について、過半数の学校が「議論して考えを深める」、「多面的・多角的に考える」ための指導を挙げている。また約40%の学校が「道徳科の特質を踏まえた I C Tの効果的な活用」を課題として挙げている。これまでの自分自身の道徳科の授業を振り返ってみても、本来は多様な考え方によって学び合うことができるはずの話合いが効果的に行われず、生徒は自分の考えを伝えるにとどまり、考えを深めている様子が見られないことがあった。

そこで、本研究では、効果的な話合いによる生徒同士の学び合いを実現させるために、「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（平成29年7月）」にある「生徒が行う自己評価や相互評価について、（中略）、生徒が自身のよい点や可能性に気付くことを通じ、主体的に学ぶ意欲を高めること」に着目し、研究を進めることとした。

特に、ねらいに迫る中心的な発問において一人1台の学習者用端末上で共同編集機能を用いた相互評価シートを基に話合いを行う。生徒同士で行う相互評価活動では、認め・励ます姿勢を基盤として、ねらいとする道徳的価値に対する他者の考えについて、①共感、②疑問、③新たな気付き、④興味・関心をもった、⑤その他といった視点で行う。話合いを効果的に展開させるために、教師は、例えば、生徒同士で互いに考えの差異点を確かめさせ、その背景にある理由に着目させることで「なぜ」と更に自己や他者と深く対話するよう促す支援をする。この過程で、生徒が、自分の考えに他者が共感や興味・関心を示せば、それが自信につながり、他者が自分の考えに疑問を示せば、再考し、他者のコメントを参照しながらよりよい生き方を模索するきっかけになると考えた。

このように、相互評価活動を取り入れた話合いを通して、生徒が自分の考えのよさや可能性に気付き、他者参照をしながら、多面的・多角的に道徳的価値を捉え、よりよい生き方を模索しながら人間としての生き方についての考えを深めることをねらいとした道徳科の指導法を開発する。

第2 研究仮説

話合いにおいて I C Tを活用した相互評価活動を取り入れることで、生徒が多面的・多角的に道徳的諸価値を捉え、生徒同士が互いの考えに対しコメントし合う中で、生徒は自分のよい点や可能性に気付き、それが自信につながり、人間としての生き方についての考えを深めようとするのではないかと考えた。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

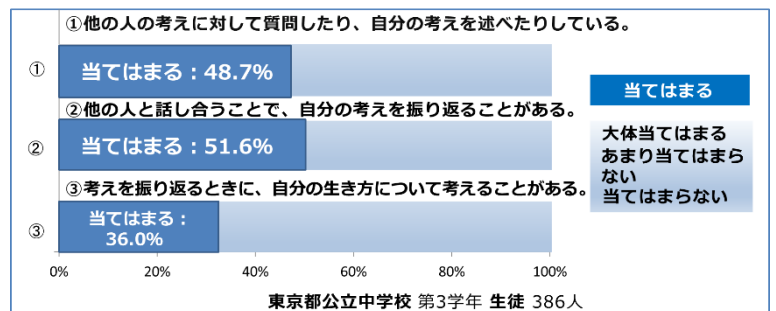
先行研究では、小学校の体育の授業で相互評価活動を取り入れ、技能向上のために児童同士で互いに技能に対するアドバイスを送り合い、他者と協働しながら学習に取り組み、客観的な視点を持ちながら自身の技能等を改善していくことが記載されていた。このことから、相互評価活動は自身の技能等の改善に役立つ活動であることが分かった。

しかしながら、道徳科の授業において話合いの場面で、相互評価活動を取り入れることを通して、生徒の学びに与える有効性（主体的な学びを促すことや道徳性を養うことにつながるなど）を検証している研究は見当たらなかった。

2 調査研究

(1) 道徳科の時間における話合いに関する調査研究結果

令和6年7月、都内公立中学校4校の第3学年生徒を対象に、道徳科における話合いに関する調査を質問紙法により行い、386人から回答を得た（図1）。「他の人の考えに対して質問したり、自分の考えを述べたりしている」という項目で、「当てはまる」と回答した生徒は48.7%



であった。「他の人と話し合うことで、自分の考えを振り返ることがある」及び「考えを振り返るときに、自分の生き方について考えることがある」という項目について、「当てはまる」と回答した生徒はそれぞれ51.6%、36%であった。これらの結果から、話合いでは、他者との意見交流が少ないこと、話合いで自己を振り返り、人間としての生き方について考えることが少ないことが分かった。

図1 道徳科の時間における話合いに関する調査研究結果

(2) 調査研究結果から考える研究の視点について

そこで、話合いで相互評価活動を取り入れ、他者に質問したり、自分の考えを述べたりする場面を設定することで話合いを効果的に展開することが必要であると考えた。具体的には、話合いで、生徒が自分の考えを振り返り、自分の考えのよさや可能性に気付きながら、他者と協働してよりよい生き方を模索し、人間としての生き方についての考えを深めることができるのではないかと考えた。さらに、生徒が、他者とのやり取りの中で、生徒が自分のよさや可能性に気付き、それが自信につながれば、よりよい生き方を追求したいという意欲が高まることも期待できると考えた。話合いを効果的に展開するためには、相互評価活動を取り入れた話合いのみならず、その前後にある学習活動及び教師の指導（支援）も重要となる。

3 開発研究

(1) 人間としての生き方について考えを深める学習指導過程

生徒が、人間としての生き方についての考えを深めるためには、生徒の学習活動と教師の指導（支援）を一体的に充実させることが重要である（図2）。導入では、教材について生徒の興味・関心を喚起させる。展開では、教材文の範読後、教材文中で生徒が興味・関心をもった場面を基に課題（中心的な発問）を設定し、話し合いを行わせる。

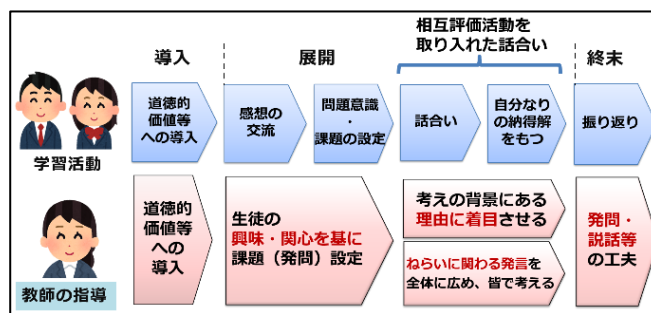


図2 学習活動と教師の指導の一体的な充実

本研究では、相互評価活動を取り入れた話し合いを、生徒が興味・関心をもった場面を基に設定した課題（中心的な発問）において取り入れる。話し合いでは、生徒が道徳的価値の多面性に着目し、様々な角度から総合的に考察する中で、人間としての生き方を主体的に模索できるよう、教師は指導（支援）を行う。具体的には、教師は、話し合いで、生徒同士で互いの考えの背景にある理由に着目させたり、ねらいに関わる発言を取り上げ、生徒に考えさせたりすることで、生徒が人間としての生き方についての考えを深めることができるよう、指導（支援）を行う。終末では、生徒が授業で考えたことを整理したり、学んだことを更に深く心にとどめたり、これからへの思いや課題について考えることができるよう、発問や説話の工夫を行う。

(2) 相互評価活動を取り入れた話し合い

ア 「相互評価シート」の作成

相互評価活動を取り入れた話し合いは、端末上で互いの考えを可視化できるよう作成した相互評価シート（図3）を基に、小グループで行う。

相互評価シートでは、生徒が課題（中心的な発問）に対し、生徒が自分の考えを入力した後、他者の

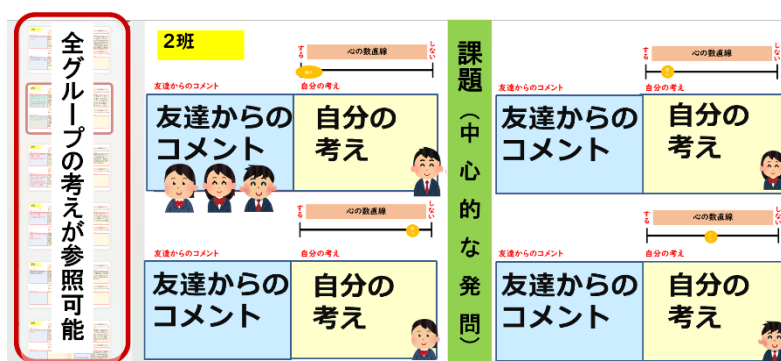


図3 共同編集機能を用いた相互評価シート

考えに対し、①共感（赤色で入力）、②疑問（緑色で入力）、③新たな気付き（青色で入力）、④興味・関心をもった（オレンジ色で入力）、⑤その他（黒色で入力）といった5つの視点で、各視点のコメントを色別に入力する。端末上で生徒は、グループ内の他者の考えのみならず、学級全グループの考えを閲覧することができる。さらに、例えば、①共感に関するコメントであれば、文字色を赤字にして、「〇〇〇という考えに共感した。」というように、共感した部分を具体的に示すよう入力することで、話し合いで考えの背景にある理由に着目できるようにしておく。

イ 話し合いの工夫

相互評価活動を取り入れた話し合いは、3つのステップからなる（図4）。

STEP 1「回答する」では、生徒は相互評価シートを基に自分の考えに対する他者のコメントを参照した上で、回答を行う。

STEP 2「聞き合う」では、生徒同士が互いの考えの背景にある理由の差異点に着目し、生徒が互いに聞き合うことで、更に深く自己や他者と対話し、自分自身を振り返り、自ら考えを見直す。

STEP 3「他者の考えを参照する」では、端末上で他の班から、自分たちにはなかった考えを見付け、それを基に話し合いを行う。この中で、生徒はより多様な感じ方や考え方に触れ、よりよい生き方を模索する。



図 4 話し合いを効果的に展開するために

4 検証授業

(1) 授業の概要

令和 6 年 11 月、都内公立

中学校第 3 学年生徒を対象に検証授業を実施した（表 1）。検証授業では教材に掲載されていた臓器提供に関する二つの手記を基に、臓器提供をする側と受ける側の様々な葛藤を押さえながら、生徒の「臓器提供」に関する問題意識を高めた上で、課題を

表 1 検証授業の概要

検証の目的	相互評価活動を取り入れた話し合いを含む学習指導過程を実践し、生徒が、ねらいとする道徳的価値について多面的・多角的に捉え、人間としての生き方についての考えを深めることができたかを検証する。
対象	都内公立中学校第 3 学年生徒（3 学級）
主題	生命の尊さ（内容項目：「生命の尊さ」）
教材	「臓器ドナー」（出典：中学道徳 あすを生きる 3 日本文教出版）
あらすじ	本教材は、臓器提供や臓器提供意思表示カードを通して、生命の尊さや価値観を深く考えさせるものである。自分の大切な人が脳死になってしまったら、自分はどのような判断をし、どのような態度をとるのか、答えが一つに定まらない問いを自分の価値観に照らし合わせて考えることになる。自分自身の考えと向き合い、仲間の考えを受け入れながら、生命の尊さを感じさせることができる教材である。
ねらい	臓器提供という現代的な課題を通して、生命の尊さを理解し、自他の生命をかけがえのないものとして尊重しようとする道徳的判断力を育てる。
課題	「あなたは臓器提供を希望するか、それともしないか。理由も併せて考えよう。」

設定した。課題の設定に当たっては、高等学校へのつながり及び他教科等での学習を考慮して行った。高等学校へのつながりとしては、生命倫理に関わる現代的な課題を通して、「どのように生きるべきか」と自立した人間として他者と共によりよく生きる自己の生き方を模索し、自己の価値観を確立していくことについて考慮した。さらに、検証授業の実施時期に、社会科（公民的分野）で自己決定権を学習していたことを考慮した。以上の点を考慮し、課題を「あなたは、臓器提供を希望しますか。それともしませんか。理由も併せて考えましょう。」と設定し、生徒がより自分自身の関わりの中で考えられるようにした。授業を進めるに当たり、生徒が課題について自ら選択・判断した上で表出された考えは、どれも尊重されるものであることを学級全体で十分に確認した。

(2) 授業における生徒の発言の分析

端末上で相互評価シートを基に行った話し合いの様子を表 2 に示した。ここでは、生徒 A の考

えの変容を見ていく。生徒Aの所属する小グループは生徒B及びCで構成される。話し合いを始める前の相互評価シートには、生徒Aは、「誰かの役に立つなら、臓器提供をしたい。」という考えを入力していた。それに対して、生徒B及びCからは共感の視点からコメントをもらっており、生徒Aは自分の考えのよさを認識していた。しか

表2 授業における生徒の発言の分析

【展開】 小グループでの話し合い	課 題 「あなたは臓器提供を希望するか、それともしないか。理由も併せて考えよう。」
	※【 】は、生徒Aに対するコメントの5つの視点を表す。
端末上での他者参照	生徒A 自分の臓器が誰かの役に立つなら、臓器提供をしたい。
	生徒B 【共感】(生徒Aに対して) 自分の体の判断は、「自分でする」というところに共感する。
【終末】 振り返り	生徒C 【共感】(生徒Aに対して) 誰かの命を助けることは素晴らしいし、共感する。
	生徒A やっぱり自分の意思を尊重してほしいと思う。
	生徒B 【疑問】(生徒Aに対して) でも、自分のことを大切に思っている人のことは考えないの？
	生徒C 【新たな気づき】(生徒Aに対して) 自分の命は、親からもらった命。最期まで自分のもので終わりたい。
	生徒A 家族か。自分の命って自分だけのものではないんだ。
	生徒A (生徒B、Cに対して) 家族は自分達の臓器提供についてどのように考えるのだろうか？
その後、生徒Aは、学級内の他の班の考えの参照を始める。	
端末上での他者参照	生徒A (生徒Aが参照した他の班の考え) 臓器提供をする家族には悲しみや葛藤があると思う。
	(生徒Aが参照した他の班の考え) どちらとも言えない。今は決められない。
【終末】 振り返り	(生徒Aが参照した他の班の考え) 臓器提供を待つ人を動画で観た。助けたいと思った。
	生徒A 臓器提供をする側と受ける側には、終わり・悲しみ・始まり・喜びなどの影響をもたらすのだな。
	生徒A 命が尽きるまで、感謝しながら精一杯生きていきたい。

し、互いの考えの背景にある理由に着目する中で、生徒Bから「自分のことを大切に思っている人のことは考えないの?」、また生徒Cから「自分の命は親からもらった命。私は最期まで自分のもので終わりたい。」との意見をもらうと、生徒Aは自分の命を取り巻く「家族」の存在に気づき、生徒B及びCに質問しながら、再考を始めた。さらに、教師が他者参照を促すと、生徒Aはすすんで他の班の考えの参照を始めた。他者のコメントを参照する中で、臓器提供をする側と受ける側の異なる立場の思いを知り、更に想像する中で、授業の終末では、生徒Aは、「命が尽きるまで、あらゆるものに感謝しながら精一杯生きていきたい。」と話していた。このことから、生徒Aは、話し合いを通して、多様な感じ方や考え方に触れ、「生命」を多面的・多角的に捉えながら、人間としての生き方についての考えを深めていた。

(3) 話し合いが効果的に展開されていないグループへの支援

課題「あなたは、臓器提供を希望しますか。それともしませんか。理由も併せて考えましょう。」に対して、小グループ内の全生徒が、臓器提供について、「どちらとも言えない」と考えを伝え合うだけ

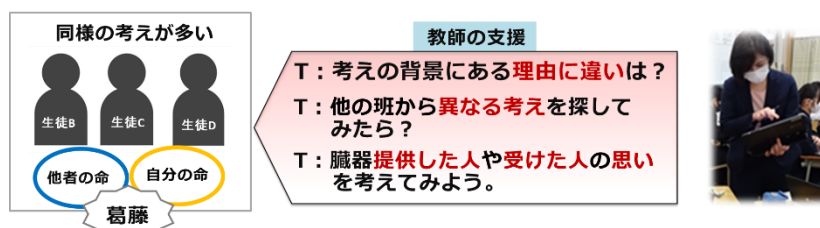


図5 話し合いが効果的に展開されていないグループへの教師の支援

で、話し合いが効果的に展開されていない班があった。その班には、図5に示すような支援を行った。最初に、考えの背景にある理由に着目させた。すると、彼らは、「人の命を助けたい」、でも、「自分の命は最期まで自分のものでありたい」という内面にある「葛藤」に気付いた。次に、教師が、他の班の考えを参照することを勧め、さらに、話し合いを深める視点として、「臓器提供をした人と受けた人の思い」を考えさせた。すると、話し合いの中で、「生命」を様々な角度から考察しながら、「生命とは何か」と生徒自ら考えを深めていく様子が見られた。

(4) 話し合いを終えた後の生徒の記述内容の分析

次に、話し合いを終えた後の生徒の記述内容の分析を行った(図6)。検証授業の振り返りとして、「生命について、考えたことや気付いたことを書いてみよう。」との問いに対し、生徒が自分自身との関わりの中で考え、

生命について、考えたことや気付いたことを書いてみよう。

- ・命はつながれてきたものだということを自覚して生きたい。
- ・命には終わりがあるからこそ、一度きりの人生を精一杯生きたい。
- ・命をつないで助け合う社会を作っていかなければいけないと感じた。
- ・自分が判断したことが正解なのかなと思った。
- ・一生懸命生きていくことが自分たちの使命なのかなと思った。

図6 話し合いを終えた後の生徒の記述分析

他者の考えを参照しながら、考えを広げたり、深めたりしながら、人間としての生き方について考えを深めている様子が見られた。特に、下の2つに象徴されるように、「自分が判断したことが正解なのかな。」と自分の考えに揺らぎがある生徒については、他者の考えと自分の考えとを照らし合わせながら、よりよい生き方を模索しているのではないかと考える。

5 事後調査

検証授業実施校の生徒 91 名に対し、検証授業後(12月)に、図1で示した調査と同様の調査を行い、その結果を比較した。「当てはまる」と回答した生徒の割合は、微増した(図7)。これは、事後調査では検証授業の内容に限定して調査したこと、さらに授業実施後すぐに調査したためであると考え。生徒の道徳性は徐々に養われるものであることから、今後も長期的視点にたった指導を継続していく。

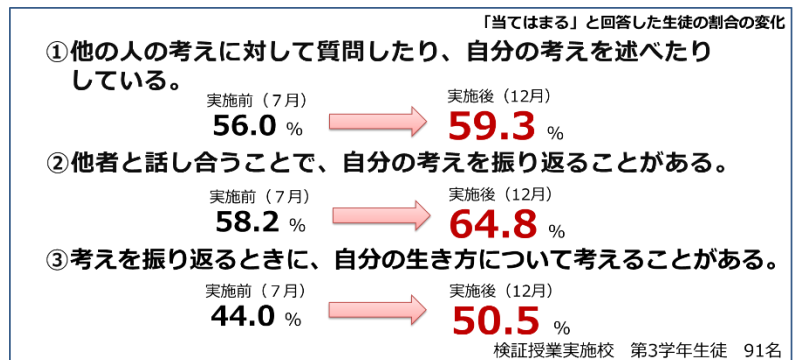


図7 事後調査結果

(1) 生徒の自由記述

相互評価活動を取り入れた話し合いに対する自由意見では、「友達からのコメントをもらった時に、あなたが感じたことや考えたこと」について、次のような意見が得られた。

- ・「共感してもらうことで、自分の考えに自信をもてたし、疑問があった時には、自分の意見を更に深く見つめ直し、いろいろな角度から考えることができた。」
- ・「友達からのコメントによって自分の考えを見直すことになったり、新たな会話への発展につながったりした。他の人の意見をきちんと見て考える機会になった。」
- ・「友達から違った考えのコメントをもらうことで、自分に足りなかった部分を知ることができ、よりよい考えにするヒントをもらえた。」
- ・「友達からの疑問コメントを見て、自分がなぜこの意見になったのかと自分の考えを客観視して考えることができたと思う。」
- ・「友達からの反応をきっかけに、自分の中で新しい考えが生まれたり、考えを深めたりすることができた。」

(2) 生徒へのインタビュー

相互評価活動を取り入れた話し合いについて、生徒インタビューを行った。インタビューか

らは、自分の考えに対し、『共感する』とコメントされると、自分の考えのよさに気づき、自信をもって自分の考えを話すことができた。』『自分にはない考えだ（新たな気づき）』とコメントされると、それが自信につながり、他者の考えを取り入れながら自分の考えをもっとよくしたいと思えた。（自分の考えに可能性を感じた。）」と、よりよい生き方を模索しながら考えを深める様子が見られた。

上の(1)及び(2)の結果からも、研究仮説を肯定するような生徒の記述や発言が見られた。

第4 研究の成果

本研究の成果は次に示す通りである。

- ・開発した「相互評価シート」を活用した話し合いでは、生徒同士の意見交流の中で、生徒が自己を振り返り、他者の考えを参照しながら、よりよい生き方を模索し、人間としての生き方についての考えを深めている様子が見られた。さらに、他者からコメントをもらうことで、自分の考えのよさや可能性に気づき、自信をもって発言できるようになった生徒もいた。
- ・話し合いで、教師が、生徒同士で互いの考えの背景にある理由に着目させたり、他者参照を促したりするといった指導を行うことで、生徒が道徳的価値を多面的・多角的に捉え、人間としての生き方についての考えを深める様子が見られた。

第5 今後の課題

本研究の課題は次に示す通りである。

- ・ICTを活用した相互評価活動を取り入れた話し合いをより深めるためには、話し合いの着眼点を明確にすることが重要である。
- ・「相互評価シート」を道徳科の他教材にて活用したり、他教科での話し合い活動にも応用したりし、研究の妥当性をより一層高めていくことが重要である。